

水鳥の鉛中毒について

日本白鳥の会会長 松 井 繁

この春以来、水鳥の鉛中毒に関する情報及びこれについての環境庁などの対応をマスコミがしばしば取り上げている。中毒の原因の主たるもの、鉛の散弾を鉄の散弾に換えなければならない、というのがその主旨である。

この6月の中旬にベルギーのブリュッセルでIWRBが主催して水鳥の鉛中毒のワークショップが行われ、わが会から副会長の阿部学氏、監事の星子廉彰氏が出席した。二人の報告は今号に掲載されているのを見て頂きたい。その中で阿部氏は、デンマーク、カナダ、アメリカなどの鉛弾の使用制限について報告しており、日本（環境庁）は、無毒弾の切り換えに早く着手することを望んでいる。星子氏は鉄と鉛の散弾を装弾した猟銃を試射し、鉄か鉛の「たま」かを他の参加者たちと当てる競技(?)に参加した。鉄弾の反動は左程ひどくはなく、この正解率は約30%で、命中率も悪くはないと報告している。日本の猟銃でも、火薬の量、散弾の径を小さくすれば、日本のがっちりした銃であれば、鉄弾の使用に耐えるのではないだろうかとも述べている。環境庁、狩猟団体、銃器、銃弾メーカーが一刻も早く鉄弾を製作されることを望むものである。

なお、宮島沼での観察例が多く、鉛中毒の症状を把握している星子氏は、2月の伊豆内沼研修会の白鳥観察で数羽のオオハクチョウが中毒症状を呈しているのを発見した、特にこれら病鳥たちは、その鳴き声に特徴があるとのことである。これらの病状のビデオを、総会や研修会の折りに供覧したいという申し出がある。我々にも病状から見た鉛中毒症の診断をし、中毒死の水鳥の回収に協力したいものである。回収問題については総会で報告する予定である。